

## 第4回震災復興ボランティア 活動記録

記録者：JTB中国四国 松山支店 野本 典宏

### ■ 11月19日（土）

松山空港から羽田空港へ。羽田空港から連合会から支給されていたJR券にて北上駅へ。  
新幹線の中でスマートフォンを使い最新の情報を検索。あれから半年以上の時が流れ、テレビでも  
そう多くの情報が入らなくなっていたからだ。  
その検索途中、震災直後の写真が目映った。少女が瓦礫の中で一人素足のままで泣いている写真。  
改めて出来ることを全力で頑張りたいと思った。  
北上駅への到着は夜だったが、夕食を取るためにホテル付近を散策した。  
被災地から程遠い地域なので、町を歩いていても震災の影響を感じさせるような雰囲気はない。  
翌日の活動に向けて早めに寝た。

### ■ 11月20日（日）

朝7：30にホテルメッツ北上前に集合。参加メンバーとの顔合わせ。  
みなさん、活動のための準備をしっかりとっていた。  
約2時間かけて、被災地の陸前高田市へ。途中昼食購入のためコンビニへ立ち寄りもした。  
当初ボランティア期間中の現地天気予報は雪で、実際に活動できるかどうか不安なところでした。  
最悪の場合はボランティア活動でなく、視察に変更となる可能性もありました。  
陸前高田市まで行く途中の山間部は雪が降っていたが、幸い海沿いの陸前高田の天気は良かった。  
ただし、これからもっと寒くなってこの陸前高田にも雪と深刻な寒さが訪れると思うと少しつらい気  
持ちになる。  
活動場所に入る前に陸前高田ボランティアセンターに立ち寄る。



そこでまずボランティア活動の証明書でもあるシールをもらい、各々目立つ場所に貼り付ける。  
なにやらやる気が出てくる。  
スコップや台車などをバスに積み込む作業を行い、その後、ボランティアセンタースタッフから活  
動中の注意事項説明や被災状況の話を聞いた。  
その話の中ですごく胸に残ったことは

- ・ 陸前高田市約8,000世帯の中でおおよそ半数の4,000世帯が全壊もしくは半壊しているという極めて被害状況が甚大であること。
- ・ 陸前高田市の元々の人口が約2万4千人に対し、死者数は約1,500名、行方不明者が未だ約300名もいるということ。
- ・ そしていまなお亡くなられた方のご遺骸が日々発見されており、前日にもボランティア活動

中にご遺骸が発見されたということ。(それはつまり参加している私自身にもその発見の可能性があるとということである)

そんな話を聞いたとき、怖くもなったが、亡くなられた方がいち早くご遺族の元に戻ればよいなと思った。

ボランティアセンターを出発するときボランティアセンターのスタッフが笑顔で大きく手を振ってくれて見送ってくれた。

たくましく、ありがたい存在だなと感じた。

活動する場所に近づくにつれて被害が大きくなっているのがすぐに見て取れた。

テレビでも見たことのある風景。

きれいに瓦礫がそれぞれの場所にまとめられて山のようにになっているが、撤去はされていない。

その瓦礫の山の近くにはたくさんの重機が置かれているが動いていない。

まだまだ復興には時間がかかるのだろうと感じた。



ほとんど建物が残っていないような風景の中に、いくつかの建物が形としてしっかり残っていた。当然、使い物にならないくらいに壊れている。

その中に5階建てのアパートがあった。窓が見事に4階までは割れて廃墟と化している。それを見ればどこまで高く海水が襲ったのかがすぐに分かる。



そんな風景を眺めながら私達参加者は活動場所に着いた。そこは瓦礫が散乱している畑だった。つまり活動内容は畑に埋もれる瓦礫撤去だ。小さな瓦礫が畑中に散らばっている。

そんな瓦礫を全て撤去したところで海水やヘドロを含んだ畑が元のように畑としての機能を取り戻せるのかどうか疑問もあった。

が、ボランティアセンターに依頼があり、助けを求める人がいる以上、とにかく頑張るのみである。

大変だったのは足元が非常に悪かったこと。海水とヘドロが混じり畑の土がとにかく軟らかくなっており、瓦礫を積んだ台車がなかなか思うように進まない。試行錯誤しながらも、協力をしながら力づくで台車を進めていった。男も女もなく、瓦礫の撤去をひたすら行った。

途中、依頼主であるおばあちゃんが現場に来た。80歳くらいだろうか。

少し話をした。自分ではもうどうすることもできないから、ボランティアセンターへ依頼をしたそうだ。こうして助けを求めている人の力に自分達がなっているんだと思うと疲れていた体にまた活力がみなぎってきた。出来るだけの力とスピードで台車を運んだ。

活動中の注意点として、活動参加者が怪我をしたり、体調を崩さないことが前提にある。少しでも役に立つのが目的だが、逆に迷惑になってはいけない。リーダーの指示のもと、とにかく休憩はこまめにとった。

活動と休憩を繰り返しながらあっという間に活動終了時間の15:00になり、1日目の活動終了。日が落ちるのも早く、体力低下、集中力低下による事故防止の観点からも、あまり遅い時間までの活動には設定していないようだ。

陸前高田ボランティアセンターに戻り、使ったスコップや台車などを返却。ばい菌感染などを防ぐため、必ず手の消毒とうがい消毒を行う。最後に温かいお茶やお菓子を頂き、バスに乗り込む。到着のときと同じで帰りのときもセンタースタッフさんの笑顔の見送り。現実を考えると笑顔が不釣合いな場所にまんべんの笑顔がある。被災地の方や我々参加者に元気をくれる笑顔だ。

## ■ 11月21日（月）

2日目の作業は、前日作業した畑の隣にある一角の草刈り。

草の中にはやはり瓦礫がたくさん埋まってあり、草刈とそれらの瓦礫の撤去を行った。

ひたすら草を刈り、埋もれている瓦礫を引っ張り出しては台車に積み、集約場へ移動させる。

この日も15:00までの活動だったが、ぼうぼうだった草はほとんど刈り取られ、道路からも見通しの良い場所になっていた。

前日の瓦礫と併せて私達のかき集めた瓦礫の小山を見て少し誇らしげになった。



ただ、遠くに見えるよその場所の瓦礫の山はもっともっと高く大きい。

その横に重機が並んでいることから、これはおそらく重機で集められたものだと思うのだが、見渡すだけでもそんな大きな瓦礫の山が数え切れない程たくさんある。



それらの大きな山と比べると私達の集めた瓦礫の山なんて、蟻のようだ。

そう思うと、気が遠くなるような思いもした。

それでも重機が入らないような畑から瓦礫の多くが取り除かれたことは間違いない。と自分に言い聞かせる。

帰りには昨日とは違った風景が見られた。

昨日はぜんぜん動いていなかった重機達がたくましく動いている。

日曜でなく、平日になったからか、と思った。

とにかく多くの重機がガタガタと動いている風景を見てたくましく思った。



ボランティアセンターへの帰りの途中、奇跡の一本松を車窓から見た。

遠くで、一瞬しか見えなかったが、いつか元のようにたくさんの松があの一松を取り囲む日がくればいいなと願った。



ボランティアセンターに到着するとまた前日と同じようにうがい手洗いをを行う。  
その後、ボランティアセンターでTシャツとシール、そしてキーホルダーを購入。  
キーホルダーは被災者の方が仮設住宅で瓦礫を削ったりして  
作ったアクセサリ付きだ。今ではお気に入りのバッグに付けている。少しでも被災地とつながって  
いたいからだ。  
これらを購入したお金が少しでも被災地のために役立てばいいなと思う。

最後にみんなで記念撮影をしてバスが出発。  
当然のように、ボランティアセンタースタッフが大きく手を振って笑顔で見送ってくれる。  
本当に素敵な人たちだ。  
また必ず来ようと思って、センターを後にした。



#### ■ 参加しての感想

1日目の夜、有志で食事会を兼ねての参加者の懇親会があった。そこで他の参加者からこのボランティア活動に参加している理由を聞く機会がありました。  
もう何度も来ているという人もいたし、東北出身だという人もいた。  
みなさん、本当に素晴らしい考えを持って活動に参加していました。  
私も少しでも役に立ちたいと思いました。  
また、少しでも役にたったんだと実際に自分で実感できるようになりたかった。  
そこには自己満足の要素も多分に含まれていたと思います。  
でも私は自己満足であろうが、どんな動機であろうとも、この震災に関心を持ち続け、何かを実践することこそが大切だと思います。

#### 最後に

このような機会を作って頂いたグループ労働組合連合会様に心から御礼を申し上げます。  
本当にありがとうございました。  
今後も出来る限りでこのような活動を続けてもらえればと願っております。